徳島新聞　２０２２年（令和４年）８月１１日　木曜日（２３）スポーツ掲載
徳島新聞社提供

四国インターハイ　第19日

木村（生光学園）16強　女子63キロ級

強豪と熱戦　存在感示す

全国高校総合体育大会（四国インターハイ）第19日は10日、松山市で柔道、香川県丸亀市でアーチェリーが行われた。生光学園勢4人が出場した柔道女子個人では、63キロ級の木村優花が初戦の2回戦を突破した後、団体戦で敗れた淑徳（東京）の選手と3回戦で再び対戦。優勢負けしたものの、16強入りを果たした。他の3人は2回戦までに敗退した。アーチエリー団体は、男子は柏陵（福岡）、女子は大津商（滋賀）がいずれも2連覇した。11日は愛媛県今治市でボートが始まり、徳島市立勢が出場する。

柔道

16歳で迎えた2度目のインターハイで、生光学園の木村が存在感を示した。5位入賞した団体の先鋒（せんぽう）戦で3勝した実力を見せ、個人63キロ級では初戦の2回戦で一本勝ち。8強を懸けた3回戦では、団体戦で敗れた淑徳（東京）の徳田に優勢負けしたものの、今後に期待を抱かせる内容だった。

また徳田と熱戦を繰り広げた。初対戦となった3月の全国選抜大会では、団体1回戦の中堅戦で引き分け。今大会は9日の団体準々決勝で内股を決められ、一本負けを喫したばかりだった。

「雪辱してベスト4に入る」。そう言い聞かせて畳に上がり、序盤から気持ちの入った動きを見せた。互角の組み手争いを展開し、立ち技を仕掛け合う。「一本取るか、取られるか」。緊迫した中で一進一退の攻防が続いた。しかし、終盤に間合いを詰めてきた相手の内股を防ぎ切れず、技ありを奪われた。

徳田はこの後、勝ち進んで準優勝。2日続けて敗れた木村は「悔しいけど相手が一枚上手だった」と声を絞り出した。

京都市出身の木村は、生光学園の伊田監督の生家である同市の道場・志翔館で小学1年から柔道を学んだ。洛南中2年時に全国中学総体に出場。伊田監督の勧めもあって生光学園に入学した。平日は朝練で3～5キロ走り込み、放課後は3時間の練習で体を追い込み、着実に力をつけてきた。強豪との戦いに大きな刺激を受けた様子の木村は「技のスキルを上げ、来年こそはベスト4入りできるよう頑張る」。次回のインターハイへ課題を持ち帰る。（須見千次郎）

女子個人63キロ級３回戦　最後まで諦めず攻め続ける生光学園の木村（右）＝松山市の愛媛県武道館（立花善晴撮影）